

シリーズ
よえもん

～伝わる話～
感謝のこころ

藤樹は11歳の時に、おじいさんから買ってもらった「大学」という書物を読んで、「聖人学んで至るべし」と志を立てます。志を立ててからの藤樹の暮らしは、今までと全く違うものになりました。例えば、朝起きるのも、ご飯をいただくのも、剣術の稽古をするのも、学ぶのも、徳を修めて立派な人になるためのものと思えば、一瞬一瞬がやり甲斐のある喜びの時間となったのでした。

12歳のある日のことです。藤樹は食事をしていました。おはあさんがバシをこめて作ってくれた、ご飯を噛みしめながら藤樹は思っていました。「こうしてご飯をいただくのは誰のおかげだろう？」お米はお百姓さんがバシをこめて育ててくれたのだ。それだけではない。おじいさんのお働きで米が得られ、それをおはあさんがおいしく炊いて下さった。この味噌も、醤油も、沢庵も、たくさんの人の丹精のおかげで今ここにあるのだ。そして「私がここでこうしてご飯がいただくのは、父上と母上が私を生み育てて下さったおかげだ。その私を引き取って日々学ばせて下さるおじいさん、おはあさん。藩を立派に治めて下さるお殿様……私はこれからご飯をいただくときには、ご飯とともにこれらのご恩を噛みしめたい。」



そうしみじみ思いながら、ふと顔を上げるとおはあさんの優しい目が藤樹を見守っています。藤樹はたくさんの人々への感謝の気持ちでいっぱいになりました。

＝ 出典 財団法人新教育者連盟 中江藤樹より ＝

* 記念館だより *

節分、立春を過ぎ層の上では春となりましたが、雪が残りまだまだ寒い日が続きますね。寒い雪の中といえは、伝った話として、雪の中藤樹がお母さんにあひまれの葉を届けに行った、あひまれこうやくのお話があるんですね。そのお話の銅像が安曇川の道の駅にあるのを、みなさんはご存じですか？ 近くを通られた際には、ぜひ一度じっくりご覧下さい。



「論語」為政第二 書、瀧田瑞穂さん

故きを温ねて 新しきを知る

「古いことに習熟して、そこから新しい意味を引き出すことが大切である」という意味です。ただ、「古いことばかりやっている人は、新しい方については、おろそかになりがちですし、逆に、新しきを好む人は、古いことなどを省みない傾向が往々にしてありがちです。大変おもしろいことですが、その両方を兼ねることが大切です。」